

主よ、私たちの神よ。あなたこそ、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたが万物を創造されました。みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。(黙示録4:11)

【説教要旨】2022/08/14(日)札幌聖書キリスト教会 ヨハネ 12:12-19

説教題「主イエスは何故ろばに乗って、最後のエルサレム入りをなされたのか」八尋 勝

【本日の説教の聖書箇所について】 ■説教の聖書箇所や主題のご要望が無ければ、説教箇所の偏りを避けるため、聖書同盟の『聖書通読表』本日の箇所(ヨハネ 12:12-19)から説教させて下さい。聖書同盟の解説書『みことばの光』は使用していません。(その場合は書き添えるようにします。) ■小生が札幌聖書キリスト教会で、この聖書箇所から前回説教致したのは16年ほど前、2006年9月3日(日)でした。その中心メッセージは同じですが、説教の進め方(スタイル)は変えています。 ■説教者は、其々の聖書箇所(テキスト)によって、説明型、証明型、適用型、主題完成型など、説教のかたちを決めます。(今朝の説教は説明型です。)そして、聴衆の方々の諸事情や世の中の動向等を考慮し、御言の真理を其々の生き方に適用できるよう、努めております。 ■引き続き説教者のためにお祈り下さい。

【参考までに/ヨハネの福音書の緒論】(短縮版) ■著者は<イエスが愛された弟子>(21:20,40)、<ゼベダイの子ヨハネ>(マタ 10:2)。 ■執筆年代 紀元85年から90年頃。 ■執筆場所 エペソと思われる。 ■執筆事情 主イエスを神学的な視点から伝えるために、晩年、協力者を得て記された。 ■執筆目的は、20章32節。 ■特色 (1)単純な文体、(2)深遠な思想、(3)頻繁な用語、(4)(20章のクライマックスに向けた)意図的な構成。ヨハネの福音書を解釈する3つのキーワードは、<神の子キリスト>、<信じる>、<いのち>(20章31節他)。(5)選択された内容。(主イエスの譬話が記されて無い。共観福音書には記されていない5つを含む、以下の7つの<しるし>(イエスがキリストである証拠としての奇跡)を選んで記している。⇒①カナの婚礼。②王室の役人の息子の癒し。③ベテスダの病人の癒し。④五千人の給食。⑤湖上の出来事(水上歩行)⑥生まれつきの盲人の癒し。⑦ラザロの復活。ヨハネの福音書のクライマックスは、十字架と復活の主イエスに対する、トマスの信仰告白(20:28,29)。(6)大部分がユダヤでの活動。(従ってユダヤの行事、祭りの記述が多い。) 【注】ヨハネの福音書はその執筆目的を優先しているので、共観福音書のように時系列で記されているとは限りません。(7)個人的会見の記事が多い。(ニコデモ、サマリヤの女、ピリポ、トマス、マリヤとマルタなど)。(8)主イエスの疲れ(4:6)、渇き(4:7)、悲しみ(11:35)など、人間的な面も詳述されている。

【主イエスの公生涯における最後の1週間】 【注】当時のイスラエルの暦は、1日の始まりと終わりは、日没から日没までの為、教会暦は当時の暦の呼び方であることに注意を。

■<AD30/4/1/土>ベタニアでの晚餐。マリヤの油注ぎ(ヨハネ 12:1-11。マタイ、マルコにも記述)。 ■<AD30/4/2/日> 此処が今朝の説教箇所 エルサレム入城(共観福音書全部に記載)夜はエルサレム城外のベタニア泊か。 ■<AD30/4/3/月>主イエスの宮きよめ(共観福音書すべて)。 ■<AD30/4/4/火>ギリシャ人の訪問(ヨハネ 12:20-50)。 ■<AD30/4/4/火、または4/5/水>イスカリオテのユダの裏切り(共観福音書) ■<AD30/4/6※日没までは木曜日>最後の



晚餐の席で弟子たちの洗足(ヨハネ 13:20)。 「洗足の木曜日」と呼ぶのは日没前であったゆえ ■<AD30/4/7/日没後から金曜日>最後の晚餐(共観福音書)ゲッセマネの園で祈り(共観福音書、ヨハネ 18:1)。 ■<AD30/4/8/金、夜明け前>主イエス逮捕される。弟子たちの離散(共観福音書、ヨハネ 18:2-12)。 ■<AD30/4/8/金>大祭司の官邸⇒総督官邸(中略)同日昼12時前(マタイ 27:45/直訳第6時)十字架に。

棕櫚(しゅろ)の主日における主イエスの言動を、共観福音書と、第4福音書を照らし合わせることで、第4福音書の記者ヨハネが私たち読者に伝えようとしているメッセージの理解を深めましょう。

共観福音書(マタイ・マルコ・ルカの福音書)	第4福音書(ヨハネの福音書)
■<荷ろばの子である子ろば>(マタイ 21:5)ゼカリ	■<ろばの子>(ヨハネ 12:14,15)ヨハネも共

ヤ9:9の預言の成就である、平和の王である主イエスの入城。尚、<ろばと子ろば> (マタイ21:7)と記されているのは、<子ろば>を借用する際の経緯が背景にあると考えられる。マルコ11:4,7.ルカ19:30,33,34では、<ろばと子ろば>ではなく、<子ろば>のみを記述。

観福音書と同じくゼカリヤ9:9の預言を引用し、主イエスが平和の君であることを強調。
■<なつめ椰子の枝>(ヨハネ12:13)の記述は第4福音書のみ。(ヨハネがこれを書いた理由を、下記の積極的理由の欄に記載。

I. (「主イエスは何故ろばに乗って、最後のエルサレム入りをなされたのか」その消極的意味)

■主イエスのご自身が、ユダヤの人々が待ち望んでいる政治的・経済的救済(使5:36以下他)のために来られたのではないことを強調するために、このような行動(今ふうに申せばパフォーマンス)をなされたのでした。【参考】この日曜日における、主イエスの最後のエルサレム入城の記事は、共観福音書すべての記載されていますが、下記の【注2】に記述することは、第4福音書(ヨハネの福音書)のみ記述。(さらに、本日は読みませんが)このあと、ローマ帝国の総督ピラトの対応や、主イエスとの対話についても、この第4福音書のみが詳しく記述。

II. (「主イエスは何故ろばに乗って、最後のエルサレム入りをなされたのか」その積極的意味)

旧約聖書の預言どおり、ご自身が平和の王であることを人々に表わすため。⇒【旧約聖書の

預言】<娘シオンよ。大いに喜べ。娘エルサレムよ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。

(中略)あなたとの契約の血のゆえに、わたしはあなたの捕らわれ人を、水のない穴から解き

放つ。>(ゼカリヤ9:9-11) 【注1】ゼカリヤは紀元前500年代中頃の預言者。■主イエスヨハネ12:20以下でギリシャ人(異邦人)たちが面会を求めた時点から、ご自身が十字架で死なれる時(ヨハネ17:1)が来たことを悟って行動されたのでした。御父と人々へのご愛と献身。

■王が(軍馬ではなく)驢馬(ろば)に乗るのは、当時の世界における平和時の慣わし。(ヨハネ12:16参照) 【注2】民衆が<なつめ椰子の枝>(ヨハネ12:13/欽定訳聖書では<プラム・ツリーの枝>と翻訳)を手にして主イエスを歓迎したその歴史的背景は、旧約聖書には書かれていません。共観福音書に<なつめ椰子の枝>の記述が無いのは、旧約聖書にその根拠が書かれていない為かも。■<なつめ椰子の枝>の由来は、紀元前400年代に旧約聖書(マラキ書)が編纂された後、旧約と新約聖書の間時代に書かれた『マカバイ記』第2,10章5-7節に。

<神殿の清めはキスレウの月(八尋注:太陽暦の11月から12月)の25日に行われたが、その日はかつて異国の者たちによって神殿が汚された日であった。仮庵祭のしきたりに倣い、ユダヤたちは歓喜のうちに八日間を過ごしたが、つい先ごろまで、けだものと同然に山中や洞穴で、仮庵祭を過ごしていたことを思い出した。テウルソス、実をつけた枝、更にはしゅろの葉をかざし、御座の清めにまで導いてくださったお方に賛美の歌をささげた。>(『新共同訳聖書』日本聖書協会、1987年)ヨハネは此処でも、主イエスの入城を正確に記述しているのです。

■にもかかわらず、その週の金曜日に主イエスを十字架につけたのは、主イエスがユダヤ人たちの殆どが期待した、政治的・経済的救済主ではなかった失望や怒りゆえ。■しかし主イエスは、(私たちを含む)人々の期待以上の恵みをもたらすために、すなわち、あなたとの契約の血のゆえに、わたしはあなたの捕らわれ人を、水のない穴から解き放つ>(ゼカリヤ9:11)のために、行動されたのです。(ヨハネ17:1,4,5,10,22,24) ■天の御父はこの主イエスを墓から(金曜日を数えて数え)三日目(日曜日朝)に復活させ、神への悔い改めと、御子イエスを信じる者を、十字架の血によって赦し(ゼカリヤ9:9-11)、永遠の命を私たちに今も与えておられるのです。

【結び/適用】■私たちは人生において、自分の期待外れによる失望や怒りを経験することがあります。しかし、神は私たちの思いを超えて、万事を益としてくださる御方です。■本紙冒頭の聖句(黙示録4:11)は、天における天使(御使い)たちの賛美です。あなたも、いま目に見えるところだけで、すべてを判断するのではなく、人間の目的である、救い主、イエス・キリストを信じて、神の栄光をあらわし、神を永遠に喜ぶ人生を、全うさせていただこうではありませんか。